

石岡繁雄先生の思い出

石岡繁雄先生がなくなった、平成18年8月15日午前9時ごろ、友達7名と2泊3日の劔岳登山に出発して車で立山に向かっていました。快晴に恵まれ、忘れられない登山でした。この山行を先生も喜んでくれると思っています。何か因縁を感じました。下山帰宅して、OBの廣澤さんから先生逝去の連絡があったと聞きました。すぐに適切な言葉も表現できず、先生の葬儀を失礼しました。

先生から登山の指導を受けたのは、小生が豊田高専に赴任した昭和39年から、高専創設2年目から、鈴鹿高専へ転勤された昭和45年までの7年間でした。登山経験のない小生を副部長として、温かく見守って指導していただいたことに感謝しています。教えを受け始めたのは、当時20代であったこと、部員と一緒に活動すればできると感じ、またお人柄に引きつけられたからでした。先生には、当時、学生主事(副校長)を務め多忙の中を、御在所・愛知川などでの合宿にしばしば同行し、テント生活の基礎や、四季の登山の素晴らしさを教示していただきました。

豊田高専山岳部の最初の夏合宿は、鈴鹿山脈の雨乞岳附近で、森川、菅沼、水野、水谷、山田君達とはじめてテント生活をはじめました。次の年の夏には、初めての北アルプス合宿を、立山から槍ヶ岳までの縦走予定で、部員は張りきって計画・準備し出発しました。ところがバスの終点、立山の室堂につくと、大雨に遭遇して出鼻をくじかれ、翌日天気は回復しましたが五色が原を経て薬師岳に至って、私の経験不足もあり、槍ヶ岳までの縦走を断念して有峰に下山した苦い経験がありました。それから40年後の劔岳登山では、先生の逝去を知らず、この苦しかった合宿のことを懐かしく思い出して歩いていました。登山の楽しさを教えていただき感謝しています。

先生の指導の基本は、予め適切なガイダンスをし、学生自らが準備をして行動できるようにすることでした。事前の準備こそ大事ということ、後ほど登山に限らず、いろいろの場面で痛感しました。岩登りは、初期、岩稜会の高井さんから鈴鹿や定光寺等で登山指導を受け、岩登り訓練後、涸沢のテント場を出発し五六のコルから前穂岳へと、順番を追って岩登りを行いました。積雪期の訓練としては3月の五竜岳、富士山にも同行していただきました。そのときの登山の爽快感、達成感は言葉で表しにくいほどでした。

石岡先生は一步一步着実に“step by step”の精神で、適切な登山指導者として、高井さん、山田先生に協力を頼み指導されたのです。石岡先生の基本姿勢は、学生の能力を引き出そうとする、“education”教育だったと思います。寮での指導も“宿直の方は学生にその背中を見せてください”と答えていました。中学を終えたばかりの生徒を、高専では学生として処遇・対処したのです。自主性を重んずる寮は、豊田高専寮の伝統になっています。学校では、教師は先頭に立ちやすいものですが、旧制高校の伝統を身につけた石岡先生は、部員に対し、自立できるような指導を選んだのだと思います。創立直後の豊田高専7年間、学生同様に登山のご指導を頂いて、学生が心酔(尊敬)するには当然だと思いました。

先生の口癖を、学生がよく真似ていました。例えば、“そんな馬鹿な・・・”、“擬声：グワー、など”合宿のテント内での先生のお話を、皆は真剣に聞いていました。お話は自身の登山の経験談でしたが、即、最高の登山講座でした。上高地の積雪期の奥さん(敏子さん)のお話もお聞きしました。具体的なお話を通じて、行動における知恵を授けて頂いたと思います。例えば、合宿では新入部員は余裕もないので荷物はできるだけ少なく、経験を積んだ上級生が大きな負担をすることは、合理的でもあり、部の伝統になりました。

知らぬ間に、石岡先生の指導法を表面的に真似ていたのですが、先生のご体験とは比較になりませんので、昭和46年に先生が鈴鹿高専に転勤されると、山岳部を担当できるか迷いました。先生だからこそ学生を指導できたのですから…。すぐに、不安が表面化したのは、昭和46年の夏、鈴鹿の藤内壁での岩登り合宿で、練習を終え岩場を下降中、2年生の石川君が転倒し頭部を負傷しました。意識不明らしいと連絡が最初学校に伝えられ、安土幸一郎先生(学生主事)と大野俊夫先生(副部長)が鈴鹿に車で向かいました。小生は当日名古屋大学にいました。石岡先生もすぐ駆けつけ適切な援助をしていただき、幸い石川君は一週間の入院ですみました。新聞にも報道されました。須賀校長先生はとても心配され、私は力不足を強く感じました。須賀先生は小生に注意をしませんでしたが、学生主事は部員に対し適切に安全注意されました。部員に対し、すまない気持ちで一杯でした。しかし、山岳部長をすぐに辞退することはできないと思いましたので、続けるにあたり、勉強をしようと思いました。ワングル部の伊藤勉先生が立山の文部省登山研修所に研修に行き、良かったと進めてくれたので、翌春、立山研修所の春山の研修に出かけました。

研修所創立時、石岡先生は講師を務めていました。研修所では高校山岳部顧問の先生方と一緒に、研修所内の人工岩場で岩登りの基本練習と室堂附近で3泊の春山合宿でした。とてもいい経験でした。それでも、小生の力不足は解消しなかったと思いますが、続ける決心をしました。部員にすまないと思いましたが、私の力では岩登りはできないので、岩登りを辞めてほしいと部員に伝え了解を得ましたが、当然、岩登りを続けたい部員は何人かいました。

この年の夏合宿は既に計画書もできていましたが中止しました。その後、御岳(46年12月)、唐松岳(47年3月)、後立山縦走(47年7月)、聖岳(47年12月)、御岳など、山岳部合宿を続けました。これも、熱心な部員が多かったからです。当時の部員の顔を、不思議ですが、はっきり思い出すことができます。大野俊夫先生と伊藤勉先生と一緒にだったので安心でしたが、この間、石岡先生は薄氷を踏む気持ちだったと思います。ご心配をおかけしたことを、生前謝らなくてはいいませんでした。石川君はしばらく休養して、山岳部に戻り、中心となって活動して多くの山に登り、卒業しました。とても嬉しかったです。彼に小生は救ってもらった気持ちでした。それ以来、幸い、大きな事故はなく過ぎましたが、部員は徐々に少なくなりました。時代が変化し、先生のような偉大な指導者は少ないように思います。

豊田高専山岳教育のこと

須賀太郎校長先生と石岡先生だから、高専2年生の5月末の木曾御岳登山、この登山を山岳教育といいました、を始めたのだと思います。一回生から始まった山岳教育は10回で終わりましたが、卒業生には忘れられない思い出となったようです。2年生120名、6回目からは土木工学科が増設され160名、が5月末の残雪期の御岳山に集団で登るのは珍しい行事だったようです。御岳登山の前に、訓練として、ガイドンスもしてから、2年生全員で土曜日午後猿投山で集団登山し、1週間後、木曾の御岳山に向かいました。先頭を体力的に弱い女子学生と石岡先生が歩き、大きな集団なので意識的にゆっくり歩いたとお聞きしました。

毎回同行した須賀先生は途中の黒石神社にお参りをしていたのが印象的でした。最後の10回目は74歳だったと思います。全員安全に登山できます様に、と祈っていたのでしょう。麓の鉱泉旅館(2合目か3合目)に宿泊して、翌日の早朝から歩き出しました。ゆっくりした歩調でも確実に一步一步進めば、頂上に達するのだと体験させたかったのだと思います。また自然に触れるよい機会でした。2回目から上級生の山岳部員は前夜、田の原にテントを張って宿泊し、後輩を見守る様になりました。小生も毎年部員と行動を共にしました。部員は後輩のため喜んで協力しました。御岳は、10回以上登山した懐かしい山です。須賀校長先生が退任する前年、協議した結果、御岳での山岳教育を中止しました。それからしばらくして、安土先生を中心に、金時山&富士山の宝永までの集団登山か乗鞍岳登山をはじめました。現在は、学科も増えて、この200名の集団登山は不可能になり

ました。

鉾泉旅館の家高さんと、昨年6月末に上高地で五朗さんの墓参でお会いし、お元気なのに驚きました。石岡先生とお会いしたのは、このときが最後でした。石岡先生は、このときもお元気に、気力でその場所まで歩き、まだまだお元気な様子でした。

鹿島槍スキー場での合宿のこと

山岳部員も雪山経験をしようとして、スキー合宿もしました。最初は鹿島槍スキー場でした。私達は、テントで生活し、テントの外に置いた卵が凍って、その厳しさを体験しました。スキーの上達は学生が早かったと思います。体育の寺沢猛先生からスキーを習いました。河口勘次先生、あづみさんも一緒だったと思います。

八事のお宅のこと

立山合宿の前夜に、学生と一緒に先生のお宅に泊めていただき、奥さんにご馳走していただいたのも懐かしいです。そのお礼も述べる機会もなくなりました。石岡先生のお部屋は、まるで、大学の研究室のように感じました。また、鈴鹿のお宅に大野先生と伺ったときも、変わらずご夫妻に歓待していただきました。OB 会を御在所で開いた時、石岡先生の高所安全研究所を見せて頂きました。

屏風岩登攀記のこと

この本は何回も読み、石岡先生のお人柄が文章から自然に伝わってきました。特に印象に残っているのは、つぎの最初の文章でした。

“登山というのは、しょせん「行」タートの世界である。その意義をいかに「言」ロゴスの世界に求めてみたとしてむだである”

後から考えると、これは先生の「背中を見せる教育」観、人生観を、登山を例にして、簡潔に述べているように思います。先鋭的登山経験に裏打ちされたこの言葉は日常生活でも強い説得力を持って響くので、学生がこの本を読んで先生に心酔したことも分かります。

ナイロンザイル事件のことは、報告書から先生の苦難の歩みを推察するのみですが、建築構造設計不正や薬害にしても、関連する同根の問題だと感じます。似たことが水面下にあるのかもしれませんが。そんな危うさがない社会が理想です。

先生の毅然とした生き方が私達へ伝わってきます。後に続く人間は先人・先達を見て成長するのだよ、との信念をもってみえたのでしょうか。石岡先生の88年の人生は、人間として一貫し、高峰を一途に目指したように感じられます。

これまで、思い出すままに書き続けてみましたが、先生的一端を述べたに過ぎません。天国で、ご夫婦と一緒にしてみえることでしょうか。思い出は尽きませんが、石岡繁雄先生のご冥福をお祈り申し上げます。 どうもありがとうございました。

合掌

豊田高専名誉教授 渡邊與作
(平成18年9月15日 記)



左の写真

昭和40年3月 五竜岳春山合宿

左端が渡邊先生

下の写真

昭和40年12月 赤倉スキー合宿

左から渡邊先生、山岳部員の荻須・戸田・水野・菅沼・山田・後藤さん、座っているのは清水さん



右の写真

昭和42年5月

御岳山岳訓練 八海山荘前にて

上段右から二人目が渡邊先生、

左から2番目は渡邊先生の奥様

下段右端須賀先生、その隣が父

下の写真

昭和43年5月

御岳山岳訓練 御岳頂上にて



右の写真

御岳頂上で万歳をする学生さん達

左は校長の須賀先生

